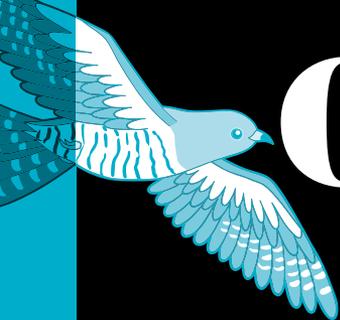


CHRONOS

Institute for Women's History & Culture
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY



「もじすく」渡邊正大 (本学文学部学生 / tachibana photo)

平安の昔から、
「昔の人」の懐かしい思い出を
呼び起こすとされた橘の花の香り。
その橘を最も好んだ「時の鳥 (ホトトギス)」。
「CHRONOS 時の鳥」は、
ギリシア神話の「時の神」クロノスを頭上に戴き、
「時」の大空をはばたく鳥をイメージしています。

クロノス [時の鳥] vol.54 2026.3 CONTENTS

〈巻頭エッセイ〉
こどもと親を取り巻く現状
—看護の視点から—
過去に開かれた窓 9
作品のウチソト 9
歴史遺産とジェンダー 9
イギリス女性生活誌 54
近代日本音楽史を彩る女性たち 15
福沢諭吉の女性論—その光と影
INFORMATION



こどもと親を取り巻く現状 —看護の視点から—

伊藤 弘子 本学看護学部看護学科専任講師

1 少子化の加速と社会構造の変化

我が国の出生率は急激に低下しており、少子化に歯止めがかかっていない危機的な状況となっております。一九七〇年前後には二・一程度で安定していた合計特殊出生率（一人の女性が一生に出産する平均の子どもの数）は、二〇二三年に二・〇〇、二〇二四年には二・一五と過去最低を更新し続けています¹⁾。この背景には、核家族化、価値観の多様化、経済状況の悪化（貧困の拡大）などが複雑に絡み合っています。これらは単なる人口統計上の問題に留まらず、こどもの体験機会の喪失、親の孤立化、地域社会の繋がりの希薄化を招き、親の子育ての困難さとこどもの成長発達への深刻な影響を引き起こしています。

2 こどもの変容：集団遊びの減少

こどもの成長発達において、遊びが果たす役割は極めて重要です。我がこどもの頃は、学校から帰宅してランドセルを置くと、毎日のように外へ飛び出して遊んだものでした。クラスメイトや近所の友人と遊ぶうちに自然と輪は広がり、いつの間にか大きな集団になることも珍しくありませんでした。しかし現在、こうしたことも同士の交流はとでも減少しています。かつて放課後の異年齢集団で形成されていた「ギャング・エイジ」は、親や教師の権威から離れ、独自のルールや葛藤を通じて「他者」を理解し、自己統制や自律的徳を学ぶ極めて重要な場でした²⁾。今日では、習い事の増加（小学生で八七・七%が実施³⁾）や都市化による遊び場の喪失、テレビゲームやSNSの普及により、室内の遊びが増えるなど、こどもたちは

育児の不安や疲れを吐き出す場が完全に遮断されます。この物理的な孤立は、産後うつや育児ノイローゼの直接的な引き金となっております。「子どもの泣き声が苦痛。包丁を自分の首に当てた」「子どもを2階から投げ落としたい衝動にかられた」という声に象徴されるように、児童虐待へとエスカレートするリスクを孕んでいます。また、現代の孤立は、単に「周りに人がいない」ことだけではありません。SNSの普及により、二四時間いつでも他者の「理想的な育児」が可視化されるようになりました。これが、周囲に相談相手がいない親にとって、「自分だけがうまくできていない」という過度な自己否定や、「完璧な親でなければならぬ」という強い強迫観念を生んでいきます。デジタル上でつながってはいても、現実の困りごとを助けてくれる手は存在しないという「デジタル上のつながりと現実の孤立」のギャップが、親の孤独感をより深めています。

4 社会制度の現状と展望

こうした事態を受け、こども家庭庁は二〇二六年度から「こども誰でも通園制度」を本格実施し、就労の有無を問わず一時預かりを利用しやすくするなど、こどもの成長支援と親の孤立解消に向けた支援を強化しています。また、共働き・共育での実現に向けて、「男性育児を当たり前に」することを最優先課題の一つとして掲げています⁴⁾。こうした制度の整備とともに大切なのは、親が一人で抱え込むのではなく、地域の人みんなで育てていこうという「安心感」を届けることです。「地域子育て支援拠点」などを活用し、親が「一人のひと」に戻る場を地域の中につくっていく必要があります。親の心が満たされるのが、こどもの健やかな育ちを支える力となるからです。

すべてのこどもが豊かな愛情の中で暮らし、親が安心して「この手でわが子を育てたい」という願いを幸せな形で叶えられる社会へ、私たちは専門職者として地域社会のつながりを編み直し、一人ひとりに寄り添った支援を重ねていくことが大切です。本学では研究プロジェクトとして、二〇二三年度より学部横断型

偏った体験を余儀なくされています。調査によれば、放課後の過ごし方は動画視聴やゲームが上位を占め、外遊びや友だちとの会話時間は減少傾向にあります⁴⁾。その結果、年少者や年長者と触れ合う機会をほとんど持たずに大人になっていくことも少なくありません。こども同士が集団で遊びに熱中し、時には葛藤しながら、互いに影響しあって活動する機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われています。このように、切磋琢磨しながら多様な体験を積む機会を欠いたまま成長する現状は、社会性や協調性の育成を阻害する要因として危惧されています。

3 親の変容：孤育ての深刻化

こどもたちが仲間同士の遊びを通して社会性を育んでいた放課後の風景が失われたことは、こどもだけでなく親の孤立にも拍車をかけました。道で会えば声をかけ合う、年配の人が育児のアドバイスをくれるなど、地域社会というゆるやかなネットワークが機能しなくなった現代、育児は家庭内へと閉じ込められ、いわゆる「孤育て」が社会課題となっております⁶⁾。

かつての日本では、祖父母や近隣住民が育児に関わる多世代・地域共助が一般的でした。しかし、都市化に伴う核家族化の定着に加え、単身世帯の増加や共働き世帯の増加により、隣近所との付き合いはさらに希薄になっていきます。この結果、特に乳幼児期のこどもをもつ親は、日中の大半をこどもと二人きり、あるいは狭いコミュニティの中だけで過ごす「密室育児」を余儀なくされています。転居などで周囲に頼れる知人がいない場合、親は外部との接点を失い、

共同研究として「ジェンダー・ストラクチャー研究ユニット」を立ち上げました。「ジェンダーの構造を考える—本学学生に見る専門職意識とジェンダーの萌芽—」をテーマに掲げ、基礎的調査として看護職の初期段階に位置する看護学部学生へのアンケート調査を実施し、職業を選択する経緯の意向を確かめたところです。さらに、現職の看護部長等の管理職者へのインタビューを通じ、日本における雇用の実態について分析を進めています。子育ては母親だけが担うものではなく、父親はもちろん、祖父母や地域社会が共に関わることが当たり前の社会になれば、育児における様々な孤立が解消されるはずですが、こどもも親も健やかに過ごせるように、ジェンダーの視点から紐解いていきます。

【参考文献】

- 1) 厚労省「令和六年（二〇二四）人口動態統計月報年計（概数）の概況」<https://www.nhfw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai24/dl/gaikyouR6.pdf>
- 2) 田中理論「子ども社会とは何か—ギャング・エイジの仲間集団研究—」『子ども社会研究』二二（一）七（日本子ども社会学会（二〇二二年））
- 3) 厚生労働省「子どもの生活状況（一）放課後に過ごす場所」https://www.nhfw.go.jp/toukei/saikin/hw/syuseiji/18/dl/kekka_02.pdf
- 4) 学研教育総合研究所「小学生の書 WEB版（二〇二四年一月調査）」<https://www.gakken.jp/kyouikusunken/whitepaper/202411/>
- 5) 文部科学省「第一章子どもの生活の現状」https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/katei/08060902/002.pdf
- 6) 榊原智子「深刻化する子育ての孤立と解決のカギ—少子化対策を超えて、全ての親と子を支える「共同養育」の社会へ—」『生活協同組合研究』五七（三）一四—二二（公益財団法人生活協同組合研究所（二〇二三年））
- 7) 上田有香、堅野洋子、向坂香織、森智香子「親子を孤立させない地域づくりを目指して—あさぎ町における母子保健の取組み—」『自殺予防と危機介入』四四（二）三六—四一（日本自殺予防学会（二〇二四年））
- 8) じふも家庭庁「じふも未来戦略」<https://www.cfa.go.jp/resources/strategy>

過去に 開かれた 窓



飯塚 一幸

本学文学部歴史学科教授

9

渋沢家の嫁敦子の境涯

二〇二一（令和三）年のNHK大河ドラマとして『青天を衝け』が放映され、二四年七月から使われ始めた新一万円札の顔に採用されたことで、「日本資本主義の父」渋沢栄一の知名度は大いに上がりました。それとともに、栄一の長男篤二が妻敦子を家に置いて芸者玉蝶と同居し、周囲の度重なる説得にも応じなかったことから、一九二二（明治四五）年一月に栄一が篤二の廃嫡を決め、一月の臨時親族

大学に進学しました。その際に敦子は、自分も同行して京都に住もうと思いが義父栄一の承諾を得るのは難しいだろうなどと、子を思う心情を綴っています。さらに、一九三〇（昭和五）年秋には田



渋沢敦子（1880～1943年）
（渋沢史料館所蔵）

会でこの方針を確認することになったという、渋沢家の複雑な内情も知られるようになりました。

篤二の妻敦子（一八八〇～一九四三）は公家華族の伯爵橋本実梁さねあきらの娘で、一八九五年に篤二と結婚し、九六年に敬三、九八年に信雄、一九〇一年に智雄が生まれています。篤二が廃嫡となり敬三（後の日銀総裁、大蔵大臣）が渋沢家の相続人とされた直後、敦子は三田綱町の家を出て、本郷西片町、高輪車町、駒込神明町などの借家を転々としています。佐野眞一氏は敬三の青年時代に触れ、「人生で最も多感な十七歳から二十五歳までの八年間を、暗い母子家庭で過したことになる」（『渋沢家三代』）としています。これは不正確です。渋沢一族の子弟のうち、敬三・信雄と尾高朝雄（栄一の先妻千代の兄尾高信五郎の孫）は、栄一の長女敦子の夫穂積陳重の発案により一九一〇年一〇月に設置された渋沢一族の学寮（曙寮）で生活し、通学していたのです。敬三らは、日曜日の夜から土曜日の午前まで学寮で暮らし、土曜日の午後か

中夫妻の世話で敦子は信雄と京都旅行を楽しんでおり、「此度の旅行程気楽に愉快にすこし候事ハ全く始めて」と記す程に、日頃の憂さを晴らしたのでした。

他方で、田中一族の期待を一身に集めて東京帝国大学医学部へと進んだ秀央の兄良馬の長男田中正稔まさとしは、秀央が留学していた間の学費を渋沢家から受けています。敦子にとっては世話になった秀央への「報恩の万分ノ一にも」なればと思っ行って行った援助でした（『田

ら日曜日の夕方まではそれぞれの家に帰っていました。敦子が転々とした借家は母子生活の場であったわけではなく、「いつも哀しい内面を隠しているわけにはゆかなかったから籠る小さい家が必要とした」（『渋沢敬三上』）敦子の居所だったので。

ところで、穂積陳重のぶひらの郷里宇和島の後輩という縁で、一九二二（大正元）年秋から曙寮の舎監として渋沢一族の子弟の面倒を見ていたのは田中秀央ひでなかでした。当時秀央は東京帝国大学文学部大学講師としてギリシア語とラテン語を教えていたものの生活は苦しく、穂積陳重は舎監として雇うことで苦学する秀央を支えようとしたのでしよう。一九一四年夏に秀央は結婚しますが、学寮から三〇歩ほどの近所に新居を構えれば学寮を訪ねています。秀央の最初の妻艶子も再婚相手の静枝もいずれも敦子に気に入られ、両家の関係は家同士のものとなり、それは秀央が一九二〇年七月京都帝国大学に就職した後も続きました。

こうした縁で、秀央が残した資料

中秀央 近代西洋学の黎明

これらの書簡からは、「渋沢家の重圧に終生苦しまなければならない悲劇の女性」（『旅する巨人』）として描かれる敦子の、栄一の孫三人の子育てに心血を注ぐことに「自己実現の道を求めるほかな」かった（『渋沢家の女性たち』）日々の姿と心情が浮かび上がってきます。それとともに、敦子の栄一に対する接し方を読み取ることもできるでしょう。私にとって敦子書簡の読解は、書簡という史料の魅力と可能性を感じる貴重な経験となりました。

【参考文献】

- ・佐野眞一『旅する巨人―宮本常一と渋沢敬三―』（文芸春秋社、一九九六年）
- ・佐野眞一『渋沢家三代』（文春新書、一九九八年）
- ・渋沢敬三伝記編集発行会編『渋沢敬三 上』（一九七九年）
- ・渋沢雅英『父・渋沢敬三』（実業之日本社、一九六六年）
- ・渋沢雅英『渋沢家の女性たち―千代・敦子・敦子の生きた時代―』（現代女性文化研究所、二〇〇八年）
- ・菅原憲二・飯塚一幸・西山伸編『田中秀央 近代西洋学の黎明―憶い出の記を中心に―』（京都大学学術出版会、二〇〇五年）

細田守作品における〈女性〉表象

『果てしなきスカレット』を中心に――

杉岡 歩美 本学文学部日本語日本文学専任講師

二〇二五年一月、細田守監督の四年ぶりの新作『果てしなきスカレット』が公開されました。細田監督がフリーとなって七作目（『時をかける少女』、『サマーウォーズ』、『おおかみこどもの雨と雪』、『バケモノの子』、『未来のミライ』、『竜とそばかすの姫』）の作品です。『果てしなきスカレット』は、デンマーク国王女「スカレット」を物語の中心に据えています。

スカレットはどのような〈女性〉として描かれているのでしょうか。

今回は、細田守監督作品の〈女性〉表象について少し考えてみましょう。

細田作品に登場する〈女性〉のパターンとして一番多いのが、〈母型〉――守る、救う、導く――女性です。たとえば、『バケモノの子』に出てくる九太と行動をともにする謎の生き物・チコは母だ

と小説版では明記されていますし、楓という少女は、九太を見守り、導く存在として描き込まれています。さらに、『未来のミライ』ではミライちゃんが、『竜とそばかすの姫』では鈴が、守り、救う者として描出されます。

特に、『おおかみこどもの雨と雪』に関しては、監督自身の「理想のお母さんを描く」との発言があります。花は、おおかみおとこの理想の家庭という希望を叶える存在であり、おおかみおとこの子を守り、救う者、献身的な〈母性〉を持つ人物として表現されています。

一方で、『果てしなきスカレット』の〈女性〉はどのように描かれているのでしょうか。そもそも、この作品は、シェイクスピアの『ハムレット』、ダンテの『神曲』を敷いています。まず確認していきましょう。

て描かれています。

『果てしなきスカレット』にもオフィリアのイメージは投影されていると思われれます。「光が降り注ぐ水の庭に、スカレットは佇んでいた。薄桃色の髪は優雅に結い上げられ、耳には王家伝来のルビーのピアスが輝いている。ドレスは無数の白い花々で彩られていた。一九歳になったばかりだった」というプロローグでの描写です。「水の庭」に「無数の白い花々で彩られ」たドレスを着た若い女、というイメージは、『ハムレット』のオフィリアを想起させるでしょう。

しかし、直後に風景は変わり、「水の庭での優雅な姿とはかけ離れ」「色褪せ、擦り切れたマントを纏い、旅の荷物を背負い、無数の刀痕が刻まれた黒い皮の防具を身につけていた」姿でスカレットは登場します。そして、「その瞳は鋭く光り、歩みは力強かった。諦めを知らない意志が、彼女を前へと駆り立てていた」と続けられます。オフィリアのように受動的で溺死して終える儂い存在ではなく、スカレットは失敗してもなお復讐を狙う、「諦めを知らない意志」を持つ〈女性〉として造形

『ハムレット』はデンマークを舞台にした戯曲です。ハムレットの父が、叔父クロウディアスに暗殺され、母ガートルードはその叔父の妃になります。ハムレットは父の亡霊から復讐を命じられ、「生きるべきか、死ぬべきか」と逡巡しながら復讐の機会を狙う、といったあらすじです。

『果てしなきスカレット』文庫本裏面には、「叔父に愛する父を殺された王女・スカレットは、復讐に失敗し、『死者の国』で目を覚ます。略奪と暴力が荒れ狂う世界で再び復讐を決意した彼女の前に、現代の日本からやってきた看護師・聖が現れる」とあります。復讐に失敗したあとの《死者の国》がダンテ『神曲』、特に「地獄篇」「煉獄篇」のエッセンスが入っているところです。

あらずじからわかるように、ハムレットを〈女性〉であるスカレットに、というのが大きな変更点です。シェイクスピアの悲劇の場合は、男性社会を背景に描かれているので、女性の登場人物が少なく、『ハムレット』にも母とオフィリアの二人しか出てきていません。オフィリアはハムレットの恋人で、精神を病み、川で溺死してしま

しなおされているのです。

細田監督も「今までの伝統的な映画にあるような、王子様に守られるプリンセスではなく、今の時代にふさわしい、もつと新しい、自ら自身の途を切り開くようなプリンセス像を表現しました」と答えています。スカレットは〈戦う少女〉型とまとめることができるでしょう。

さて、今回は、『果てしなきスカレット』の〈女性〉表象が、これまでの細田作品とは異なる点を指摘しました。復讐に燃えるスカレットの旅がどうなったかはぜひご自身の目で確認してみてください。

【付記】

引用した本文は、細田守『果てしなきスカレット』（二〇二五年、角川文庫）による。

【参考文献】

- ・河合祥一郎『NHK 100分de名著 シェイクスピア ハムレット』、二〇一四年、NHK出版
- ・日経エンタテインメント！編『スタジオ地図 15周年『果てしなきスカレット』で挑む世界』、二〇二五年、日経BP



ジョン・エヴァレット・ミレー「オフィリア」1851年

歴史遺産とジェンダー 9

藤原不比等をめぐる 女性たちとふたつの弥勒像

小林 裕子
本学文学部歴史遺産学科教授



図1 興福寺北円堂

者を集め、大きな反響を呼びました。奈良興福寺の北円堂（図1）は伽藍西北に位置する堂宇で、法隆寺夢

令和七年（二〇二五）九月からの三月、東京国立博物館で「特別展 運慶祈りの空間―興福寺北円堂―」と題した展覧会が開催されました。わずか七軀の展覧会でしたが、三〇万人以上の来場

殿や栄山寺八角堂とともに知られる八角円堂です。展覧会に出陳された七軀は、北円堂に安置される弥勒仏像、無著・世親像、そして元々は北円堂にあったと考えられ、現在中金堂に安置される

四天王像でした。興福寺は奈良時代に造営された藤原氏の寺院ですが、治承四年（一一八〇）の南都焼討でほぼ全焼したため、焼失後につくられた遺物が数多く伝わります。北円堂諸像はいずれも（脇侍菩薩のぞく）鎌倉復興期の代表作例として高く評価され、台座墨書銘によって運慶一門が制作したとみられています。本稿ではより遡って、北円堂が最初にいかなる意図でつくられたのかについて述べようと思います。

養老五年（七二二）、藤原不比等の一周忌にあたり、興福寺ではふたつの弥勒像が同日、同じ追善の目的のもとで造像されました。この制作に深く関わったのは、四人の高位の女性たちです。すなわち、元正天皇と元明太上天皇の母娘、そして不比等の妻橘三千代と後に光明皇后となる光明子の母娘で



図2 北円堂本尊弥勒如来像（岩波書店『奈良六大寺大観興福寺』1・2、1999年・2000年）

す。この二組の母娘は、それぞれ異なる立場にありながら、不比等追善という一点で交差し、結果として異なる像容の弥勒を、別々の堂宇に安置することになりました。

元正天皇と元明太上天皇発願の創建時北円堂内には、本尊弥勒像を中心とする諸像が安置されました。それらの像は伝わらず、私たちが目にする弥勒（図2）は建暦二年（一一二二）頃に再興されたもので、施無畏と願の印を結んで八角裳懸座に坐す如来像です。創建本尊が伝来しないため、最初から如来形だったのか、あるいは菩薩形だったのか、従来さまざまな議論がなされてきました。というのも、弥勒にはふたつの姿があるからです。ひとつは、装飾を身に着けて兜率天で修行する成道前の「菩薩形」、もうひとつは遠い未

来にこの世に下生して成道する、飾りのない「如来形」です。しかしながら史料を検討すると、当初から如来形であった蓋然性が高いことがみえてきます。「山階流記」（沙門僊之撰）が引く「玉字記」には「西院円堂并仏菩薩縁起」と記され、本尊は「仏」、つまり如来形であったと理解できます。さらに建永二年（一一二〇七）の「興福寺僧綱等北円堂勸進状」には、北円堂再興にあたり「旧のごとく」と明記され、建築の規模とともに、本尊弥勒像以下の安置の像高が具体的に列記されています。

北円堂では、建物だけでなく仏像の高さや構成に至るまで、創建時の姿を踏まえて再興がおこなわれたのです。この点からみても、現存する弥勒像は奈良時代に構想された造像理念を忠実に受け継いだと考えられます。

一方、中金堂に安置されたのは弥勒浄土変（変は変相図のこと。仏教説話や経典の内容を造形化したもの）でした。不比等が手がけた中金堂は和銅七年（七一四）に完成供養がおこなわれ、本尊丈六釈迦三尊像を安



図3 敦煌莫高窟第329窟北壁弥勒経变部分（平凡社『中国石窟敦煌莫高窟 三』（1981年）

置していましたが、不比等の一周忌、橘三千代と光明子によって兜率天の弥勒菩薩を中核とする浄土変が追加安置されたのです。宝殿殊宮に楽器を持す天人像が含まれ、『仏説観弥勒菩薩上生兜率天経』が説く兜率天における奏楽場面とよく一致します。兜率天の弥勒は成道前である以上、像容は菩薩形であったと考えるのが自然でしょう。

このように同じ追善の造像ながら、北円堂では、将来の下生と再生を象徴する如来形の弥勒を独立堂宇の本尊とし、中金堂には、兜率天への生天を象徴する菩薩形の弥勒を安置したのです。そこには、不比等が遙か未来に再びこの世に現れ、二組の母娘に再会することへの祈念が読み取れます。唐代中国では、龍華三会を主宰する如来形弥勒と兜率天の菩薩形弥勒を一画面に描き、生天から再生に至る物語を視覚的に構

成する弥勒経変が盛んに制作されました（図3）。興福寺におけるふたつの弥勒像も、このような造形思想を背景として、四人の女性によって発願されたものと考えられます。ここにみられる二種の弥勒像は、教義的差異を示すわけではなく、それぞれの立場から不比等を追善しつつ一連の流れに即して生み出された、ひとまとまりの結晶なのでしょう。ふたつの弥勒像は、奈良時代の信仰を知るうえで重要であると同時に、仏像が思想や政治的背景、さらに家族の願いをも内包して成立していたことを静かに物語っています。残念ながら中金堂の弥勒浄土変は伝わりませんが、北円堂の諸像を仰ぎみると、不比等をめぐる四人の女性の祈りと構想を感じ取れるかもしれません。

【主要参考文献】

- 平岡定海『日本弥勒浄土思想展開史の研究』（大蔵出版、一九七七年）。
- 尾崎直人「敦煌莫高窟の弥勒浄土変相」（『密教図像』二、一九八三年）。
- 拙稿「興福寺北円堂と中金堂の弥勒像」（『日本宗教文化史研究』一四―一、二〇一〇年）。
- 図録「運慶 祈りの空間 興福寺北円堂 特別展」（東京国立博物館ほか編、二〇二五年）。



訪問保健教育の展開2

―サニタリ・ミッシュヨナリからヘルス・ビジターへ―

松浦 京子
京都橘大学名誉教授

一九世紀後半、貧民家庭を訪ねて生活改善を促した女性篤志組織雇用の労働者階級女性について語ってきて、前回、ヘルス・ウィジターと呼ばれる半ば公務職的存在になったことに触れた。しかし、現在のヘルス・ウィジターは、看護師、助産師と同一の機構 Nursing and Midwifery Council に登録される看護専門職であり、所定の教育課程を修了し、資格認定に合格する必要がある。つまり、一九世紀後半に登場したヘルス・ウィジターと呼ばれた女性の姿とは重ならないのであるが、それは、前世転換期に公衆保健衛生分野で必須の女性専門職と認識され、以後、養成課程や資格認定が整備されていったからである。そして、こうした進展がもたらされた背景には、四八回から述べてきた労働者階級女性による訪問保健教育の実績が関わっていたと言える。

世紀末以降にヘルス・ウィジターが公務職として整備されていくには、前

回で触れたように、高い乳児死亡率（世紀末時点で全国では一六・九%、労働者居住地では一九%を超える）への懸念が社会で共有されるようになったことが大きく作用していた。ただし、公衆保健衛生の公務職としての規定が国家レベルで明確化されるのは、第一次世界大戦後の一九一九年に保健省が設置された時であった。この時すでに三千名ほどのヘルス・ウィジターが全国で活躍し



Picture from a scrapbook relating to St. Pancras School for Mothers c. 1919

新生児の母親を対象とした保健教育は、訪問教育と並んで「母親学級」を開催するかたちでも進められた。（出典：Jane Lewis ed., *Labour & Love: Women's Experience of Home and Family, 1850-1940*, Oxford, 1986）

ていたのであるが、それは地方行政体によって個別に任用が進められた結果であり、各地の衛生当局の保健医官がヘルス・ウィジターの公務任用に尽力したからであった。今回からは、この間の経緯に目を向け、それが内包する問題にも目を向けていきたい。

一九世紀末、国力増強のための社会改革が進められようとするなか、それへの脅威となる乳児の死亡を防止することをめざして様々な組織が誕生し、また乳児生命保護法の制定・強化など制度的にも対策が進んだ。そして、当然ながら各地の保健医官は喫緊の課題として乳児死亡撲滅に取り組むことになるわけで、その際に彼らが有力な方途として注目したのが労働者家庭への訪問保健教育であった。すでに一八八〇年代には篤志組織による訪問保健教育が注目を集め、『フレイザーズ・マガジン』誌などの評論雑誌で取り上げられ、貴顕、有識者によって組織され、法改正や制定に影響力

を發揮した全国社会科学振興協会の總會でも議題としてとりあげられていた。こうした状況を背景に、Ladies' Health Society（婦人保健協会（LHSと略）による三〇年近くの訪問教育の実績のあるマンチェスター市において、一八九〇年、LHS雇用の専従訪問員として活動していたヘルス・ウィジターの給料の半額を市当局が負担することが決定された。

これは、公的資金を投入することでヘルス・ウィジターを全面的に保健医官の指揮下に置く体制を作り出すことを意味し、医療専門家の監督指導によってヘルス・ウィジターの訪問教育内容が良質化し、また彼女たちが請け負った保健事案の調査（衛生状況の把握、乳児死亡状況の特定）は公衆衛生の策定者である保健医官に重要な判断材料をもたらすこととなった。それゆえ半官半民という中途半端なたちであったとはいえ、示された有用性により、その後のヘルス・ウィジターの公務職化の途を開くこととなるのである。一八九七年のウィンチェスター州によるレディ・ヘルス・ミッシュヨナーの任用、一八九九年のバーミンガム市による正規公務員としてのヘルス・ウィジター任用が続いた。そして、一九〇二年になるとロンドン州が条例をもって各行政区におけるヘルス・ウィジ

ターの公的資金による任用を承認し、ロンドン州におけるヘルス・ウィジター任用の資格要件と業務内容の規定が地方行政庁によって定められるにいたった。

このように前世転換期に訪問保健教育の公務化が動き始めたのであるが、そこには、訪問保健教育の推進に熱心であった保健医官やその他の関係者が、乳児の高死亡率の原因を主として母親の失態（授乳法や育児法に対する無知、無関心）とする認識が働いていた。たとえば、もう一つの女性公衆保健衛生職である衛生査察官としてシェフィールドで活動していたF・グリーンウッドは、自身の知見や地域の保健医官から得た情報を根拠に挙げて「対策として母親への正しい育児教育が必要であり、家庭訪問教育こそが効果がある」と主張している（一九〇一年の『イングリッシュウーマンズ・レビュー』誌掲載）。とりわけ専門雑誌などでは不衛生な哺乳瓶授乳の横行などの実態が注目されてお

り、それと乳児の下痢による衰弱死が結び付けられて、正しい授乳・育児法を教える訪問保健教育の有用性を主張する論調が強まっていた。

しかし、労働者家庭における乳児死亡には、根本的には貧困、住環境の不備、母親の過重労働ゆえの不健康などの要因が絡んでおり、専門雑誌や評論誌でもこの点は指摘されていた。にもかかわらず訪問保健教育が重要視されたのは、楽観的理想主義とも言える発想が存在していたように感じられる。すなわち、これら問題要因も母親の正しい「心構え」があれば大半は是正可能であり、まずは母親が正しい知識によって矯正される必要があるというものである。例えば訪問保健教育の祖型ともいえるヴィジティング（慈善発想の家庭訪問）には、社会的上位者が劣る存在である社会下層を教導することで向上させることができるという発想が関わっていた。このような感化力を信じる構図が、近代的保健衛生策にも受け継がれているたのかもしれない。

さて、公務職任用が進むとなれば、その資格要件、養成法が問題となってくる。この点を含めて次回以降、公務職としてのヘルス・ウィジターの出現がもたらした影響について語っていききたい。



訪問保健教育の展開2

―サニタリ・ミッシュヨナリからヘルス・ビジターへ―

松浦 京子
京都橘大学名誉教授

一九世紀後半、貧民家庭を訪ねて生活改善を促した女性篤志組織雇用の労働者階級女性について語ってきて、前回、ヘルス・ウィジターと呼ばれる半ば公務職的存在になったことに触れた。しかし、現在のヘルス・ウィジターは、看護師、助産師と同一の機構 Nursing and Midwifery Council に登録される看護専門職であり、所定の教育課程を修了し、資格認定に合格する必要がある。つまり、一九世紀後半に登場したヘルス・ウィジターと呼ばれた女性の姿とは重ならないのであるが、それは、前世転換期に公衆保健衛生分野で必須の女性専門職と認識され、以後、養成課程や資格認定が整備されていったからである。そして、こうした進展がもたらされた背景には、四八回から述べてきた労働者階級女性による訪問保健教育の実績が関わっていたと言える。

世紀末以降にヘルス・ウィジターが公務職として整備されていくには、前

回で触れたように、高い乳児死亡率（世紀末時点で全国では一六・九%、労働者居住地では一九%を超える）への懸念が社会で共有されるようになったことが大きく作用していた。ただし、公衆保健衛生の公務職としての規定が国家レベルで明確化されるのは、第一次世界大戦後の一九一九年に保健省が設置された時であった。この時すでに三千名ほどのヘルス・ウィジターが全国で活躍し



Picture from a scrapbook relating to St. Pancras School for Mothers c. 1919

新生児の母親を対象とした保健教育は、訪問教育と並んで「母親学級」を開催するかたちでも進められた。（出典：Jane Lewis ed., *Labour & Love: Women's Experience of Home and Family, 1850-1940*, Oxford, 1986）

ていたのであるが、それは地方行政体によって個別に任用が進められた結果であり、各地の衛生当局の保健医官がヘルス・ウィジターの公務任用に尽力したからであった。今回からは、この間の経緯に目を向け、それが内包する問題にも目を向けていきたい。

一九世紀末、国力増強のための社会改革が進められようとするなか、それへの脅威となる乳児の死亡を防止することをめざして様々な組織が誕生し、また乳児生命保護法の制定・強化など制度的にも対策が進んだ。そして、当然ながら各地の保健医官は喫緊の課題として乳児死亡撲滅に取り組むことになるわけで、その際に彼らが有力な方途として注目したのが労働者家庭への訪問保健教育であった。すでに一八八〇年代には篤志組織による訪問保健教育が注目を集め、『フレイザーズ・マガジン』誌などの評論雑誌で取り上げられ、貴顕、有識者によって組織され、法改正や制定に影響力

を發揮した全国社会科学振興協会の總會でも議題としてとりあげられていた。こうした状況を背景に、Ladies' Health Society（婦人保健協会（LHSと略）による三〇年近くの訪問教育の実績のあるマンチェスター市において、一八九〇年、LHS雇用の専従訪問員として活動していたヘルス・ウィジターの給料の半額を市当局が負担することが決定された。

これは、公的資金を投入することでヘルス・ウィジターを全面的に保健医官の指揮下に置く体制を作り出すことを意味し、医療専門家の監督指導によってヘルス・ウィジターの訪問教育内容が良質化し、また彼女たちが請け負った保健事案の調査（衛生状況の把握、乳児死亡状況の特定）は公衆衛生の策定者である保健医官に重要な判断材料をもたらすこととなった。それゆえ半官半民という中途半端なたちであったとはいえ、示された有用性により、その後のヘルス・ウィジターの公務職化の途を開くこととなるのである。一八九七年のウィンチェスター州によるレディ・ヘルス・ミッシュヨナーの任用、一八九九年のバーミンガム市による正規公務員としてのヘルス・ウィジター任用が続いた。そして、一九〇二年になるとロンドン州が条例をもって各行政区におけるヘルス・ウィジ

ターの公的資金による任用を承認し、ロンドン州におけるヘルス・ウィジター任用の資格要件と業務内容の規定が地方行政庁によって定められるにいたった。

このように前世転換期に訪問保健教育の公務化が動き始めたのであるが、そこには、訪問保健教育の推進に熱心であった保健医官やその他の関係者が、乳児の高死亡率の原因を主として母親の失態（授乳法や育児法に対する無知、無関心）とする認識が働いていた。たとえば、もう一つの女性公衆保健衛生職である衛生査察官としてシェフィールドで活動していたF・グリーンウッドは、自身の知見や地域の保健医官から得た情報を根拠に挙げて「対策として母親への正しい育児教育が必要であり、家庭訪問教育こそが効果がある」と主張している（一九〇一年の『イングリッシュウーマンズ・レビュー』誌掲載）。とりわけ専門雑誌などでは不衛生な哺乳瓶授乳の横行などの実態が注目されてお

り、それと乳児の下痢による衰弱死が結び付けられて、正しい授乳・育児法を教える訪問保健教育の有用性を主張する論調が強まっていた。

しかし、労働者家庭における乳児死亡には、根本的には貧困、住環境の不備、母親の過重労働ゆえの不健康などの要因が絡んでおり、専門雑誌や評論誌でもこの点は指摘されていた。にもかかわらず訪問保健教育が重要視されたのは、楽観的理想主義とも言える発想が存在していたように感じられる。すなわち、これら問題要因も母親の正しい「心構え」があれば大半は是正可能であり、まずは母親が正しい知識によって矯正される必要があるというものである。例えば訪問保健教育の祖型ともいえるヴィジティング（慈善発想の家庭訪問）には、社会的上位者が劣る存在である社会下層を教導することで向上させることができるという発想が関わっていた。このような感化力を信じる構図が、近代的保健衛生策にも受け継がれているたのかもしれない。

さて、公務職任用が進むとなれば、その資格要件、養成法が問題となってくる。この点を含めて次回以降、公務職としてのヘルス・ウィジターの出現がもたらした影響について語っていききたい。

近代日本音楽史を 彩る女性たち

15

近代日本音楽史を 彩る女性たち 第一五回 悲劇のピアニスト 久野 久

佐野 仁美
教育学部
発達教育学科
本学児童教育学科教授



学校予科に入りました。入学当初、成績は後ろから二番目でしたが、肋膜炎を患って一年間休学した後、本科に進みます。幸田延の指導を受け、毎日七時間練習した久は、驚くべき進歩を示し、一九〇六年に首席で卒業しました。同級生には作曲家小松耕輔や、シヨパン弾きで有名な澤田柳吉がいます。小松は、久を「よく整った京美人のタイプで、努力して誰よりも注目されるようになった」と語っています。一九〇六年七月一〇日の『毎日新聞』は、幸田延の伴奏でベートーヴェン《協奏曲第一番》を演奏した久の卒業演奏について、「近來の同校卒業生中の稀に見る技量」「嬢は天才なり」と高く評しています。

久は研究科に進んでケーベルやシヨパルの指導を受け、一九一〇年に助教教授になります。二、三歳の時に痒癬で左手人差し指を手術し、一九一五年には夜の葵橋停車場で自動車事故に遭遇するという不運に見舞われました。人気ピアニストとなっていた久が頭部を負傷し、肋骨を折る重体に陥ったことは、新聞に大きく取り上げられました。再起不能とさえ噂されましたが、一九一六年二月三日に東京音楽学校で「恢復祝賀音楽会」を開き、ベートーヴェン《熱情ソナタ》やシヨパン《協奏曲第一番》を演奏し、翌日の読売新聞は、「白魚の様な指

先から滲み出る汗の滴」と久の演奏ぶりを讃えています。ただし、ロンドンから帰国した音楽評論家の大田黒元雄は『音楽日記抄』の中で、「心の平静を欠き、情熱的というよりヒステリック」と評しています。そして、タッチの研究が足りず、音に対する感性が鈍い乱暴な演奏を、音楽愛好家たちは「情熱に燃えている」と形容し、久自身もそういう風に自分の演奏を考えて居そうな事が困ると、冷静な判断をしています。

久は、一九一八年三月二五日の読売新聞で、「自分の打つ音の一つ一つに忠実な生血が滴っていてほしい。その中に燃え立つ或ものがあって欲しい。それを得るまでは、血の涙を流して、努めて見たい」と述べているように、なお一層の努力を続けます。兄や姉の生活の面倒まで見ていた久が打ち込んだのは、苦難を背負った作曲家ベートーヴェンでした。一九一七年に教授に就任した久は、一九一八年の独奏会では、『悲愴』『月光』『熱情』を含む五曲のソナタを演奏します。さらに、二年間のドイツ留学を控えた一九二三年二月の告別演奏会では、『告別』『ハンマークラヴィア』と後期の最後の二曲のソナタという、現在でも考えられないような大曲を並べたプログラムを演奏しています。一〇歳頃から五年間久にピアノを習っていた宮本百

合子は、自伝的小説『道標』で、久を東京音楽学校教授の天才ピアニスト川辺みさ子として、束髪から櫛を振り落とす情熱的な演奏姿を描き、告別演奏会の満場の聴衆が、音楽そのものより、いつ櫛が落ちるだろうかという好奇心から集中している様子を語っています。宮本は、聴衆の人氣が音楽の本質とは別のところにあると感じ取ったのでしょう。

一九二二年八月三〇日の読売新聞に掲載された「音楽会の新人旧人」という記事では、数年前の女流ピアニ界は久の独壇場であり、音楽愛好家は日本人には容易に弾けないとされていた大曲が平然と響きだされるのを見て驚いたこと、しかしその演奏は情熱的というよりも機械的に力一杯ピアノと戦うかのようにあつたと述べています。

一九三三年四月、久は文部省海外研究員としてドイツに渡りました。ベルリンでは研究に没頭して和服を貫き、日本食を続けていました。久は手記「芸術家の苦しみ」で、ザウアー、ダルペール、ギー



久野久 (出典:『婦人週報』第2巻第46号 国会図書館デジタルコレクション)

ゼキング、ケンプ、フリードマン、フィッシャー、シュナーベル、ブゾーニなど多くのピアニストの演奏会のプログラムを自分でも弾いて確かめ、楽譜を携えて演奏家の態度、弾き方、音響、ペダルの使い方などを書き込みながら聴いたこと、ギーゼキングの左ペダルを多用した非常に新しい演奏法に興味を持ち、六、七回も演奏会に通ったことを書いています。

なかでも、久が最も感銘を受けたのはリストの高弟ザウアーでした。久は一九二四年にウィーン郊外のバーデンに移り、一月にザウアーの前で《月光ソナタ》を弾きます。ザウアーが演奏旅行から戻るまでの間、弟子を紹介されるも、翌年四月二〇日にホテルの屋上庭園から飛び降りてしまいます。遺書はなく、過度の勉強、指先を患った絶望感や、ホームシックなど、様々な憶測が飛び交いました。身体を隠すために和服を着用し、激しい練習で痛め続けた指、平静さを欠いた精神状態——四〇歳前後での外国暮らしは、ただでさえ気苦労の多い生活であつたことが想像されます。

また、一九二五年八月一六日の読売新聞は、ドイツの各新聞が報じた記事として、「女史のピアノ奏法が非常に旧式のものであつてしかもザ教授の注意にあつても女史がその奏法を改めなかつたため遂に教授は入門を断つたのであ

るが、これが為め女史は極度に悲観して自殺を決心した」と伝えています。

久の人生は苦難の連続で、彼女は自身の境遇をベートーヴェンに重ね合わせ、崇拜していたのでしよう。血のにじむような努力で大曲に挑み、音の中に燃え立つものを求める情熱的な演奏姿に聴衆は喝采を送りました。しかし、その演奏スタイルは日本独特の文化的状況によって支えられていたことを久も感じたのでしよう。西洋ではリストの流れをくむ大演奏家たちが活躍し、その一方でギーゼキングのような、まったく新しい演奏美学を示す演奏家も出現していました。そして、第一次世界大戦の被害を受けたヨーロッパから世界的な名家たちが日本を訪れ、聴衆に本格的な芸術を直接伝え始めていたのです。

【主要参考文献】

- ・吉田光邦『文明の基軸—吉田光邦評論集三』思文閣出版、一九八二年
- ・『蘇生の喜びを楽壇に奏する久野久子女史』『婦人週報』第二巻第四六号、一九一六年、六・七頁
- ・東京芸術大学百年史編集委員会『東京芸術大学百年史東京音楽学校篇』第一巻、音楽之友社、二〇〇三年
- ・久野久子「芸術家の苦しみ」『女性』第七巻第六号、七九・八九頁
- ・『宮本百合子全集』第七巻、新日本出版社、一九八〇年

福沢諭吉の女性論

その光と影

米澤

洋子

女性歴史文化研究所
客員研究員

福沢諭吉（以後福沢）は近代日本を代表する啓蒙思想家、教育家ですが、最晩年（明治三十二・一八九九年 以後年号のみ）の著書が『女大学評論・新女大学』（以後『新女大学』）という女性論であったことは案外知られていません。しかも福沢の女性問題の関心は、すでに故郷の中津を去り東京で身を立てる明治三年、三六歳の出発点からありました。つまり福沢の思想には、最初から最後まで女性論が編み込まれているということなのです。

福沢は代表作である『学問のすすめ』（明治五〇九年）と『文明論之概略』（明治八年）を通して、文明開化を迎えたとはいえず、封建制遺風が温存される日本にあって、進むべき道を模索していた人々に、あるべき人間像、新しい世界観を明解に示しました。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と云へり」という『学問のすすめ』冒頭の有名な宣言は、人は生まれながらに平等、自由であり、学問を学び一身を独立させることが大切であると説いたものです。続く八編では「そもそも世に生まれたる者は男も人なり、女も人なり」と男女平等を唱え、「人倫の大本は夫婦なり」という一夫一婦制の新しい家族論を提唱し、その中に女性を位置付けました。これは維新後も一夫多妻（妾同居）という理不尽な男尊女卑がまかり通っていた社会を

福沢が体系的に論じた最初の女性論は明治十八年の『日本婦人論』と同じ内容を女性向きに平易な文章に書き直した『日本婦人論後編』ですが、そこには「男女格別に異なるは唯生殖の機関のみ」「男子の為す業にて女子に叶わざるものなし」「夫婦は相互に親愛し相互に尊敬するこそ人間の本分なるべし」と男女平等性が説かれています。

ところが続いて発表された『品行論』『日本男子論』では、男性の遊郭放蕩などの不品行を責めながらも、「獸欲」を止めることは難しいので、密通や性犯罪を防ぐために公娼制度は必要だと論じます。男性には不品行を恥じ、隠蔽するよう諭すのみです。さらには芸妓や娼婦を「畜妾」「人間以外の醜物」などと蔑視するに至っては、底辺の女性を排除する二重基準を感じます。これは、同年に発表された福沢の「脱亜論」に見る国権主義への転換、資本主義国家としての海外進出に伴う「娼婦出稼ぎ」容認論と軌を一にするものですが、傍らで展開していた廃娼運動を考えると、彼の女性認識の欠落点です。福沢自身が『学問のすすめ』の人間平等宣言以後の思想的退潮をいかほど認識していたか、『福翁自伝』からはわかりません。しかし自己の軌跡を回顧する形の最晩年の自伝の直後に、『新女大学』が発表されたことは、福沢にとってやはり女性論は生涯を貫くテーマであり、最後の砦だったと言えます。

今日の観点から読めば、『新女大学』は福沢の属した士族階級や富裕層の子女を対象にした夫婦論、家族論であって、『女大学』の女性隷従を夫婦間の親和的役割分担に置き替えただけの良妻賢母思想を孕んでいます。しかし対象が限られていたとしても、当時の多数を占める儒教的道徳に苦しむ女性にとって、男性の意識改革を求める福沢の女性論は一筋の光であった

打破し、女性の地位の向上を図りたいという主張であります。「身独立」した男女による「一家独立」があつてこそ「国独立」が成し遂げられるという、彼の近代国家構想の柱をなす思想と言えます。

それでは福沢の女性論がどのようなものかを見てみましょう。福沢の生涯かけての思想活動が女性論を組み込んでいる以上、それを辿ることは福沢の思想の本質とその変容を探ることもあります。当然そこには光と影、可能性と限界があるだろうことは前提となります。

前述したように、福沢は明治三年の段階で「世間に女大学と申書有之、婦人のミ罪人之よふニ視做し、これを責ること甚しけれども、私之考ニは婦人へ対しあまりに氣之毒ニ御座候、何卒男大学と申すものを著し、男子を責候様致し度」（同年二月十五日付 九鬼義隆宛書簡）と近世の女訓書『女大学』を徹徹底批判しています。明治の世になっても儒教的道徳規範のもとで、男性への忍従を余儀なくされていた家庭の女性をなんとか解放したいとの福沢の強い願望ゆえです。『新女大学』の序にも「朝一夕の思付に非ず」とあります。この書は「女大学」を逐条的に批判した上で、女性の地位向上と夫婦の平等性を列挙したもので、福沢の女性論の集大成と言えるでしょう。

はずで、その歴史的意義は消えませんが。

福沢の女性論は女性の労働権や参政権への言及はありません。彼の没後二十年を経た大正十年、山川菊栄は『新女大学』を「ブルジョアの婦人道徳を鼓吹したもので畢竟『女大学』と五十歩百歩である」と断じ、女性自らが女性の解放を目指す社会主義運動を展開していきます。

ならば私たちは旧弊と化した福沢の女性論を完全に克服したのでしょうか。選択制夫婦別姓導入の機運が高まってきた今、政府は「旧姓の通称使用」を法制化しようとしています。夫婦同姓の維持を前提に不便の解消を図る狙いも、これと引き換えに、選択制夫婦別姓の制度化が見送られるなら大きな問題です。氏名は個人の人格と結びついています。様々な理由で夫婦別姓を望む女性にとってはアイデンティティの喪失を意味します。生活の利便性が担保されるとしても、この法案が憲政史上初の女性の内閣総理大臣による国会の場に提出されたことを、我々一人一人が考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

【参考文献】

- ・福沢諭吉『女大学評論・新女大学』（講談社学術文庫、二〇〇一年）
- ・山川菊栄『明治文化と婦人』（山川菊栄集…評論篇第3巻（牙をぬかれた狼）（岩波書店、二〇一一年）
- ・ひろたまさき『福沢諭吉』（岩波現代文庫、二〇一五年）
- ・鹿野政直『福沢諭吉選集』第9巻の「解説」（岩波書店、一九八二年）
- ・西澤直子『福沢諭吉と女性』（慶応義塾大学出版会、二〇一一年）

「西洋クラシック音楽における女性の役割」

有名なショパンとジョルジュ・サンドや、リストとマリー・ダグーの関係に見られるように、19世紀のクラシック音楽において、実は女性のサポートは多大であったと言えるでしょう。

一見華やかに見える彼女らの活動ですが、ただしそこには明らかなジェンダー落差もありました。しかし彼女たちがいたからこそ大芸術家になれたこともまた事実であり、また彼女たちが19世紀における芸術の最も優れた受容者であったことも疑いありません。19世紀におけるクラシック音楽の創造におけるアンビバレントな関係をお話したいと思います。

日 時

2026年 **6月13日** (土) 13:00 ~ 16:00

会 場

キャンパスプラザ京都 JR「京都駅」烏丸中央口より徒歩約5分

講 師

岡田 暁生 (京都大学名誉教授/同志社大学客員教授)**佐野 仁美** (京都橘大学発達教育学部児童教育学科教授)

司会・コーディネーター

松實 輝彦 (京都橘大学発達教育学部児童教育学科教授)

〈定員〉250名 ※事前申込制 〈受講料〉無料

〈申込方法〉4月13日(月)9:00より受付開始(先着順)

本学HPの申込フォーム(右記二次元コードからアクセス)・E-mail・電話・FAXにて受付。

①講座名 ②氏名(漢字・フリガナ) ③郵便番号 ④住所
⑤電話番号を添えてお申込みください

複数名でお申込みの場合は、全員分のお名前をお知らせください。

〈申込・問合せ先〉

京都橘大学 女性歴史文化研究所(学術振興課)

TEL.075-574-4186(直通) ※受付時間9:00~17:00(土日祝を除く)

FAX.075-574-4149 E-mail:aca-ext@tachibana-u.ac.jp



TIME 通信

テレビ視聴率が低迷する中、TBSドラマ「じゃあ、あなたが作ってみよう」が話題作として盛り上がりを見せました。私自身、毎週欠かさず視聴したこの作品は、家庭や職場に潜むジェンダーバイアスをポップに問い直すストーリーで、多くの視聴者の心をつかみました。

「料理は女性の仕事」、「男性は家計を支えるべき」といった日常の中に潜むジェンダーバイアスを見直す物語で、登場人物たちの葛藤や価値観の変化を通じて、パートナーシップのあり方を問います。見て、「ある、ある」と共感する場面もあれば、思わずギクとする瞬間もあり、誰もが自分の中の「常識」を見つめ直すきっかけになるのではないのでしょうか。ジェンダーバイアスは、教育やメディア、慣習など

身近な要因から無意識に形成されます。ジェンダーギャップ指数がG7で依然最下位の我が国において、他者に対するバイアスを見直す取り組みが重要であることは間違いありません。そんな中、2025年10月に日本初の女性総理大臣が誕生したことはジェンダーバイアス解消の新たな一歩として、今後さらに進んでいくことが期待されます。

では、私たちにできることは何でしょうか。その第一歩は、自分の中にある無意識の偏見に気づくこと。ジェンダーに関する研修や教育を通じて理解を深め、次世代に偏見を引き継がないようにすること。社会全体で意識を変え、誰もが生きやすい環境を目指すことが、ジェンダーバイアス解消への道ではないのでしょうか。(AK)

CHRONOS(クロノス) vol.54

発行日:2026年3月

発行:京都橘大学 女性歴史文化研究所

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34

Tel.075-574-4186 Fax.075-574-4149

E-mail:iwhc@tachibana-u.ac.jp



京都橘大学
女性歴史文化研究所

Institute for Women's History & Culture
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY